

「核兵器のない世界」へ：ベンチマークと時間枠

梅林 宏道

RECNAが誕生してから間もなく3年になる。

この3年は2015年NPT再検討会議に向けた新しい再検討サイクルと実質的に重なっていた。RECNA設立の年に2015年に向けた第1回の準備委員会が開催され、RECNAではそれ以来、このサイクルにおける各国の動向をモニターしてきた。

冷戦後、「核兵器のない世界」というキーワードがクローズアップされた最初のブームがあったのは1995年のNPT再検討・延長会議を前後する時期である。その年、ロートブラット博士とバグウォッシュ会議がノーベル平和賞を受賞した。その時期には、1996年の国際司法裁判所(ICJ)による核兵器の国際法上の地位に関する勧告的意見など、重要な動きが数多くあったが、ここでは、現在につながる「核兵器のない世界」へのロードマップに関する議論について考察する。

一筋縄ではいかない大事業を達成しようとするとき、まずはロードマップあるいは行程表を作成する。その時に登場するキー概念が中間的目標となるベンチマーク(達成基準)と何時頃までにというタイムラインあるいはタイムフレーム(時間枠)である。

1996年8月、二つの重要なロードマップが提案された。オーストラリア政府が組織したキャンベラ委員会の報告書と軍縮会議に参加している非同盟諸国28か国提案の「核兵器の廃棄に向けた行動計画」である。両者は、核実験の禁止、兵器用核分裂性物質の生産禁止、米核兵器のさらなる削減、検証システムの確立、核兵器禁止条約など多くの共通のベンチマークを掲げたが、両者には決定的な違いがあった。それは、28か国提案が2020年に「核兵器のない世界」を達成するという目標時期を描いたが、キャンベラ委員会は慎重に検討した上で時間枠を描くことをしなかった。理由は明記されていないが、核兵器国の専門家が入った委員会の構成を考えると、意味のある時間枠を提案することが不可能であったに違いない。描いても絵空事になるという現実が見えていたからであろう。

その2年後の1998年、核軍縮のリーダー的国家連合となった新アジェンダ連合(NAC)が誕生した。設立当初からこの国家連合の動きに注目してきたが、筆者の理解ではNACも時間枠を伴う議論に慎重であった。1998年の設立声明には、「核兵器のない世界」を維持するためには、普遍的な条約あるいは相互に補強しあう一連の条約体系が必要だと述べ、核兵器禁止条約に相当するベンチマークは明記したが、時間枠には言及しなかった。

そのNACが2010年NPT再検討会議を契機に変化した。つまり、

2012年の準備委員会において、NACは「核兵器のない世界」の達成と維持のために必要な法的枠組みについて、「効果的であり、信頼性をもつために、強力な検証システムで支えられ、明確に定義された達成基準と時間枠を含むものでなければならない」と主張した。NACは、新しい再検討サイクルにおいては時間枠の議論が含まれるべきであると考えたのである。2010年再検討会議において、すべての加盟国が「法的枠組みの確立について努力する」と合意したのであるから、その立論は当然であった。



ワークショップで発言する梅林センター長
2014年9月15日 撮影:RECNA

しかし、実際のところ、NACはその主張よりも一歩引いたところで2015年再検討会議の課題設定をしたように見える。現在、NACが掲げている提案は、「核軍縮のための効果的な措置について、あらゆるオプションを一つのテーブルに載せて協議する」場を再検討会議の中で持つべき、というものである。一連の「人道的影響に関する国際会議」や2013年公開作業部会(OEWG)などの議論を吟味するとき、時間枠の課題を持ち出すには余りにも機が熟していないからであろう。それを象徴するのが、核兵器国や日本のような核兵器依存国が「段階的(ステップ・バイ・ステップ)アプローチ」から一歩も出ようとしていない現状である。

段階的アプローチは、中間目標を掲げてそれを一つずつ達成していくアプローチであるかのように見えるが、その理解は本質的な部分で違っている。キャンベラ委員会の提案と違って、このアプローチは時間枠どころかロードマップを描こうとしていない。一つ一つのステップが、全体として「核兵器のない世界」をどう構成するかという全体像を描こうとしていないのである。被爆国日本のこの消極性を克服するために、私たちRECNAも含めてあらゆるレベルで知恵を絞ることが求められている。

(うめばやし ひろみち、RECNAセンター長)

退任にあたって

平和活動、高校生から大学生へのバトン

三根 眞理子

2012年4月、核兵器廃絶研究センター(通称:RECNA、レクナ)の設立とともに教授を拝命いたしました。もう3年が終わろうとしています。

レクナに赴任してからの第一の任務はモジュール科目の担当でした。大きなくりは「核兵器のない世界を目指して」です。その中で細

分化されるのですが、私の担当は「被ばくと社会」、「被ばく者と医療」の2科目です。そして、もうひとつの任務は市民向け情報発信を掲げた核兵器廃絶長崎連絡協議会が主催する核兵器廃絶市民講座です。

県民・市民の皆さんが熱心にきてくださいます。はるばる雲仙から

も。毎回、レクナを叱咤激励していただき、ありがとうございます。この講座では県民・市民の皆様が心からレクナを応援してくださっているのを感じます。核兵器廃絶市民講座で一番嬉しかったのは、平成24年度講座終了後に一人の高校生がやってきました。「私は水産学部を受験するのだけど、先生の講義を受講できますか？」との質問でした。幸い、モジュールの対象学部に入っていました。このような出会いが実現するとは！平成26年度を受講生の中に彼女がいるではありませんか。

3年前にはじまったモジュール科目、2年目からは受講生も増え、広島の高校生平和大使経験者が本学に入学、また3年目には高校生1万人署名活動のメンバーが数名、27年度には、高校生平和大使経験者が入学の予定です。素晴らしい展開だと感激しております。これまで高校生平和大使経験者は県外に進学していくパターンでした。もっと素晴らしいのは、高校生平和大使経験者が長崎大学の教員として採用されたことです。まさしく、高校生平和活動のバトンが大学生へ渡されたのです。

「被ばくと社会」では原爆、報道、継承をキーワードに4人の講師をお願いしています。原爆の歴史に関しては原爆資料館の学芸員をされている奥野正太郎氏、報道に関しては長年、原爆報道に情熱をかたむけられた関口達夫氏、2世と高校生の平和活動に関する講義は平野伸人氏です。ご自身の被爆体験と写真の意義については写真資料調査部会長の深堀好敏氏にも協力していただいております。4人の先生方にはお忙しい中、学生への講義準備を熱心にしていただき、頭がさがる思いです。講師の熱意は学生に伝わり、真摯に受け止めてくれています。また「被ばく者と医療」は原研の血液学専門の宮崎泰司先生、病理学専門の中島正洋先生、そして、元放射線影響研究所臨床研究部長の赤星正純先生にお願いしました。3人の先生方も多忙な中、医学的な話をわかりやすくお話しくださいます。この7人の先生方をお願いした私の厚かましさにあきれるとともに、心優しく熱意のある先生方であることを再認識しています。7人の先生方には、いつも笑顔で助けていただき、感謝しております。このような先生方の講義を

受講できる学生は幸せ者だと内心思っています。

最後に一言。原爆被爆者の疫学研究を40年近く行ってまいりました。長崎県、長崎市のご協力なくしては原研の被爆者データベース構築はかなわなかったものと、深く感謝申し上げます。また原爆被爆者対策協議会、長崎県事業団の皆様には被爆者健診データ収集に協力していただきました。原研における被爆者の方々の情報収集において、行政の方々とおつきあいでいた関係でレクナの窓口として関わらるようにとのご指名でした。片峰茂学長、調漸副学長、土山秀夫名誉教授、朝長万左男名誉教授のお力添えで、最後の花を咲かせていただきました。

大学教員には教育、研究、運営、社会貢献の4つが求められます。医学科の学生とは情報処理入門にはじまり、原爆医学概論、医学は長崎から、環境因子系、医学統計学でつきあわせていただきました。学生とのかかわりは講義のみならず、顧問として年1回の印押しをしました。2008年にたちあげられた園芸部「ぐびろ」、2013年にできたMDC(More Discussion Club)などです。

原爆被爆者の疫学研究、原研情報室の運営、ナシムの出前講座、核兵器廃絶市民講座と、大学教員としての一通りの義務は果たしたのかなあと思っています。

辛いスタートを切った大学職員生活でしたが、長崎県民・市民、行政、学生、大学職員の皆様のお陰で無事、定年を迎えることができそうです。皆様への感謝の気持ちをこめて、お別れとします。

(みね まりこ、RECNA教授)



市民講座でお話をされる三根教授
2015年3月7日 撮影:RECNA

2015年NPT再検討会議

今年には5年に一度の核不拡散条約(NPT)再検討会議の年である。広島・長崎の被爆から70周年ともなることから、特に長崎では、核兵器廃絶へ向けて、何らかの具体的な進展を期待する声も強い。しかし、オバマ大統領の「核なき世界」ブームを背景に各国が前向きに取り組んだ2010年の会議に比べ、再検討会議を取り巻く状況は率直に言って厳しく、会議の見通しも必ずしも明るいとは言えないだろう。3回にわたって開催された準備委員会での議論も、必ずしも核軍縮へ向けての具体的な進展を予想させるものではなかった。また、再検討会議の議長候補の決定もずれ込んだために、開催前に議長団が十分な準備ができるのか、不安を抱かせるものとなっている。

再検討会議では、NPTの三本柱と言われる、核軍縮、核不拡散そして原子力の平和利用の三つが主なテーマとして、それぞれ委員会を設けて検討される。また、それに加えて、中東の非大量破壊兵器地帯設置を含む非核兵器地帯や、北朝鮮の脱退問題を契機としての脱退手続、再検討プロセスの強化なども取り上げられる見込みである。

核軍縮については、核兵器国、特に米ロが保有する核弾頭数を大幅に削減している実績を示し、また英仏も具体的な削減計画に言及することで、「大きな進展」を主張することは間違いない。しかし、非同盟諸国を中心とする国々が求めている具体的な期限を設けての核兵器廃絶へ向けての行程表の作成や、核兵器廃絶条約の交渉開始のよう

核兵器廃絶への前進は？

広瀬 訓

な思い切った提案に核兵器国側が応じるような雰囲気は無い。また、ウクライナ問題をめぐる米欧とロシアとの対立により、米ロ間でのさらなる核軍縮交渉の進展が危ぶまれているだけでなく、中国が核弾頭の数的削減に否定的な態度をほのめかすなど、核軍縮の今後に関しては楽観できる状況ではない。そのような中で、第3回の「核兵器の人道上の影響に関する国際会議」を主催したオーストリア政府が、核兵器禁止の法的な枠組みへ向けての「誓約」(ニューズレターVol.3No.2参照)を提出するための賛同国を募っており、これが会議の行方につながるか、注目を集めている。一方日本政府は、「軍縮・不拡散イニシアティブ」(NPDI)を通して、核兵器の即時発射体制の解除を求める警戒態勢解除や透明性の向上等、妥協的な提案を行う見込みである。正直なところ、日本の提案よりも踏み込んだ核軍縮の議論を進めようとしても、核兵器国側が真剣に応じる可能性は極めて低いであろう。そのような状況で、会議の決裂もやむなしとしてあくまで核軍縮について積極的に議論を進めるのか、最終的には合意を目指して妥協点を探るのか、議長団は難しい運営を迫られることになる。

核不拡散については、IAEAによる原子力関連施設への保障措置の強化について、一部の国々から不満は出されるものの、基本的には保障措置の重要性についての異論は無い。しかし、原子力の平和利用とも密接に関連するが、NPTに未加盟の国々への原子力分野での国際的な協力の問題と、国家以外の、国際的なテロ組織や原理主義団体

への核兵器およびその関連物資、技術の流出の防止、いわゆる「核セキュリティ」の問題が重要なテーマとして取り上げられる可能性も大きく、その議論が主になるかもしれない。

原子力の平和利用については、福島第一原発事故後、初めてとなる再検討会議であり、国際的には注目を集める可能性が高い。準備委員会からの議論の流れとしては、原子力の平和利用への逆風ではなく、安全性を重視しての平和利用の推進という枠組みに大きな異論が出されるような可能性は低い。むしろ非同盟諸国側が求めている原子力分野での国際的な協力の充実が主な論点になるのではないだろうか。

この三本柱以外では、長年にわたり懸案となっている中東非大量破壊兵器地帯の問題には時間が割かれるであろう。その際に、この問題が中東という地域の問題であるだけでなく、非核兵器地帯の問題である

という観点からの議論が展開されれば、北東アジア非核兵器地帯が取り上げられる可能性もあり、その場合、会議のサイドイベントとして会期中にRECNAが開催する予定である北東アジア非核兵器地帯に関する公開フォーラムがより意義深いものになることが期待される。

全般的には、核軍縮についてはあまり大きな進展は期待できず、むしろ核不拡散や原子力の平和利用について、核テロや原子力事故の防止に関する検討が実質的な議論の中心になることも予想される。もちろん、これらも重要な問題であるが、核軍縮に関する議論が、それらの陰に埋没し、型通りの意見の応酬だけで終わるような事態だけは何としても避けて欲しいものである。

(ひろせ さとし、RECNA副センター長)

ナガサキ・ユース代表団

ナガサキ・ユース代表団第3期生が決定

前号に続き、第3期ナガサキ・ユース代表団をご紹介します。

●佐々木朋哉(長崎大学工学部2年)

僕は長崎県で育ったけど、去年まで平和活動とか核問題とか原発とか一切興味を持たずに過ごしてきた。そこから色々あって今ここに参加しているけど、今回はメンバーや今から出会う人たちとおもしろいことを一緒に楽しみたい。僕がこれまでの人生で学んだことは“何とかなる”ということなので、おもしろそうだと感じたら何とかかなると思って、何にでもちょっかいを出してたくさいいい経験をした。

●竹田 稔(長崎大学多文化社会学部1年)

8月9日午前11時2分に、サイレンが鳴るのを聞き、私はこの場所に原子爆弾が投下されたのだということを改めて痛感しました。長崎という町に学生として学びに来ているのだからここでしか学べないことを学び、自分の糧にしたいと思い、ナガサキ・ユース代表団に応募することを決意しました。私たちの世代は核兵器問題の解決を将来的に担っていかなければならないので、学生である今NPT再検討会議に出席することは必ずプラスになると思います。また、私個人の将来の目標にアプローチするのにも効果的だと考えました。長崎県の学生の代表として、ニューヨークで多くを学び、多くを発信したいと思っています。

●中原ゆかり(長崎大学環境科学部2年)

こんにちは！中原ゆかりです！長崎生まれ長崎育ちの私にとって「核兵器は今すぐになくすべきもの」ということは当たり前でした。でもレクナに来て、少し世界に目を向けてみると、いろいろな立場の人や国が実にいろいろな意見を持っているということを知ることができます。それが面白くてずっと顔を出してきました。そんないろんな意見を理解した上で、長崎に育ってきたものとしての正義を貫きたいし、その方法を探りたいと思っています。被爆70周年に向けて、「ナガサキ」の「学生、若者」が何をできるのか、何をすべきなのかそのヒントをこれからの活動やニューヨーク行きを通して見つけてきたいです。刺激たっぷりの、わくわく楽しい活動となることを期待しています！

●秀 総一郎(長崎大学多文化社会学部1年)

世界には現在約200もの国が存在しており、その土地その土地で考え方や文化が違ってきます。そのように考えると、文化の違いや人種の違いにより核兵器に関する考え方も違ってくるはずですが、世界が戦争のない社会になるためには、異文化の人々の考え方を各々がしっかりと受け止め、より良い方向に進んでいくための方法を協力して考えていかなければなりません。

私はナガサキ・ユース代表団の一員として、NPT再検討会議に参加し、各国の方々が核兵器に対してどのような考えを持っているのかを学びたいと思います。また、「多文化社会」「異文化理解」という面から、日本においてメディアには取り上げられず、触れることのできない世界の核問題の現状を、長崎から日本へ、そして世界へ伝えていきます。

●西田千紗(長崎大学医学部医学科2年)

広島で生まれ育ち、幼い頃から被爆体験を持つお年寄りと触れ合ってきたことがきっかけで、昨年ユース2期生として活動しました。2回目となる今回も、前回までの経験や知識をベースに、核兵器にまつわる最新の国際議論の動向をより深く学びたいです。

それに加え、今回は特に、NPT会議に参加している世界の若者と話す機会をできるだけ多く持ちたいと考えています。日本は世界で唯一の被爆経験国ですが、ご存命の被爆者がどんどん少なくなり、核問題に関心のない若者が多くを占めてきた現状を考えると、「非被爆国」に限りなく近づいていると言えます。ですから、私達日本の若者よりもずっと核や被爆の問題に馴染みの無さそうな世界の若者がどうしてこの問題に取り組んでいるかを探ることは、とても意味のあることだと思います。

彼らの取り組みのきっかけや内容を学ぶとともに、こちらからは自分の基盤である「ヒロシマ」、そして、あらたに関わりのできた「ナガサキ」の両方について、被爆国日本の若者として、「核兵器がもたらす悲惨さ」を伝え、interactしていきたいです。一步一步、大切に進んでいきます。

●宮田美波(長崎大学医学部保健学科3年)

私は、長崎大学医学部保健学科看護学専攻3年の宮田美波です。昨年、ユース代表団2期生としてNPT再検討会議第3回準備委員会に参加させていただきました。私は会議の傍聴をニューヨークでの主たる活動とし、毎日会議室に籠っていました。そこで、私が見つけた、一つの鍵は「非核兵器地帯条約」です。今年は、昨年同様会議場に籠りながらNGOのワークショップに参加し核をめぐる国際情勢を追っていくとともに、北東アジア非核兵器地帯に関する学習を深めていきたいと考えています。

●山中智絵(長崎大学薬学部2年)

ユース代表団の一員としてNPTに関わるのは今回で2期目となります。2期生になってからは、核兵器問題の国際的動向に加えて福島原発事故についても自主的に学んできました。もともと興味があったグローバルヘルスと核問題に関連付けて学ぶことで、放射線を含む災害医療の分野で貢献できる人材になりたいと考えています。そう思うようになったのは、ナガサキ・ユース代表団の活動を通じた世界中の人々

との出会いによるものだと思います。

2015年は5年に1度のNPT再検討会議、広島・長崎への原爆投下から70年。さらに秋にはバグウォッシュ会議(核兵器廃絶を始めとする科学

と社会の諸問題と取り組んでいる団体による会議)も長崎伊王島で開催されます。このような意味深い時期に、自分が長崎に住み学んでいくことに意味を見出したいとも考えています。よろしくお祈りします。

RECNAの活動

2015年1月1日～2015年3月31日

- 1月15日(木) ■「核兵器の人道上的影響に関するウィーン国際会議」報告会
-核兵器廃絶への道筋を考える-
-講師:中村桂子(RECNA准教授)
-講師:朝長万左男(RECNA客員教授)
- 1月17日(土) ■立花隆講演会・ワークショップ(中村准教授、RECNAサポーター)
- 1月24日(土) ■平成26年度核兵器廃絶市民講座
第6回「2015年NPT再検討会議に向けて」
-講師:広瀬訓(RECNA副センター長)
- 1月25日(日) ■広島平和研究所「核・軍縮研究会」で報告
「CTBTの意義と発効の可能性」(広瀬副センター長)
- 1月27日(火) ■長崎大学熱帯医学研究所にて講演(広瀬副センター長)
「平和と健康を考えるSATREPSシンポジウム」
- 2月5日(木) ■第21回RECNA研究会
テーマ:「日米同盟下の米核政策の歴史」
-講師:太田昌克氏(共同通信編集委員、論説委員兼務)
■特別市民セミナーシリーズ「2015年NPT再検討会議に向けて」
第2回「核の傘と核廃絶に向けて」
-講師:太田昌克氏(共同通信編集委員、論説委員兼務)
- 2月6日(金) ■学生向けセミナー「核兵器の非人道性と世界の動き」
-講師:川崎哲氏(ピースボート共同代表)
- 2月12日(木) ■国際赤十字委員会(ICRC)長崎訪問団との意見交換会
(中村准教授、RECNAサポーター)
■特別市民セミナーシリーズ「2015年NPT再検討会議に向けて」
第3回「東アジアにおける核軍縮と軍備管理」
-講師:藤原帰一氏(東京大学教授)
- 3月5日(木) ■第22回RECNA研究会
テーマ「各国の核戦力データの追跡と核戦力の現状」
-講師:ハンス・クリステンセン氏
(米科学者連盟 核情報プロジェクト代表)
- 3月7日(土) ■平成26年度核兵器廃絶市民講座
第7回「被爆者の健康を考える」
-講師:三根真理子(RECNA教授)
- 3月11日(水) ■平成26年度RECNA運営委員会
■トークイベント「長崎から福島を考える」
(中村准教授、RECNAサポーター)
-講師:スティーブン・リーパー(RECNA客員教授)ほか
- 3月15日(日) ■特別市民セミナーシリーズ「2015年NPT再検討会議に向けて」
第4回「核不拡散と原子力の平和利用」
-実効性と不平等性の拡大のジレンマ
-講師:秋山信将氏(一橋大学教授)
- 3月16日(月) ■第23回RECNA研究会
テーマ:「イランの核問題と国際不拡散体制の行方」
-講師:秋山信将氏(一橋大学教授)
- 3月27日(金) ■広島平和研究所「核・軍縮研究会」で報告
「市民社会・NGOの役割」(中村准教授)

お知らせ

- 4月4日(土) **講演会の開催**
「核軍縮・核不拡散の課題と展望」
-2015年NPT再検討会議に向けて-
-講師:パオロ・コッタ・ラムジーノ氏
(バグウォッシュ会議事務総長)
-場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
交流ラウンジ地下2階
-時間:15:00-17:00
※事前申込不要/受講料無料
※同時通訳有

- 6月13日(土) **平成27年度第1回核兵器廃絶市民講座**
「NPT再検討会議の報告」
-講師:広瀬訓(RECNA副センター長)
中村桂子(RECNA准教授)
-場所:国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
交流ラウンジ地下2階
-時間:13:30-15:30
※事前申込不要/受講料無料

人 事

梅林宏道センター長、三根真理子教授が平成27年3月31日をもってRECNAおよび長崎大学を退任されます。梅林センター長および三根教授には、文字通りRECNAの立ち上げをリードしていただきました。また、同じくRECNAの活動を様々な面から支えてくださった峠憲治客員教授も3月31日をもって退任されることになりました。

RECNA関係者一同、各先生方の退任にあたり、心より感謝申し上げます。

※ニューズレターを電子版でお受け取り御希望の方は、下記メールアドレスへ御一報下さいませようお願いいたします。

RECNA ニューズレター
長崎大学核兵器廃絶研究センター

第3巻4号 2015年3月31日発行

発行 長崎大学核兵器廃絶研究センター
〒852-8521 長崎市文教町1-14
Tel. 095-819-2164 Fax. 095-819-2165
E-mail. recna@staff.nagasaki-u.ac.jp
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/

印刷 株式会社インテックス

©2015長崎大学核兵器廃絶研究センター